

平成 30 年度 学科 AO 入試 総合考査 問題用紙【武道教育学科】

試験時間：60 分

.....  
資料は、武道の国際化について言及したものである。これをもとに、以下の問いに答えなさい。

- 問1. 文中で、「武道が国際化するに際して生じる問題に、道の精神が理解されないということがある。」と指摘しているが、何故、「道の精神」は理解されない(あるいは、理解されにくい)のか、詳しく説明しなさい。
- 問2. 筆者は最後に、民族スポーツが国際化するにあたっては、これを生み出した側にその思い入れが強いほど、大きな痛みが伴い、同じようなことが他の武道でも起こっていると指摘している。具体的な例を挙げながら、このことを説明しなさい。

## <資料> 「武道国際化の痛み」

近年、文化の国際化を論じるのにグローカリゼーション(glocalization)という言葉が使われるようになった。グローバリゼーション(globalization)とローカリゼーション(localization)の二語の結合語である。グローバリゼーションが文化の地球規模化をいうのに対し、ローカリゼーションは、そうした文化が個々の社会において土着化することを意味する。グローカリゼーションはこうした二つの過程を連続するものとして切り取るための概念である。

グローバリゼーションは一般に世界の同質化をもたらすものと考えられているが、現実はそう単純ではない。確かに標準化傾向は認められるものの、他方で社会ごとに変容が生じている。すなわち、受け入れ側の社会は発信地の文化をまるまる容れるのではなく、自身の文化に適するように変化させるのであり、そうした社会ごとの土着化の総体がグローバリゼーションを現出させていると考えた方がよい。グローバリゼーションは常にローカリゼーションをとともなうのである。

武道もグローカリゼーションと無縁ではない。武道が国際化するに際して生じる問題に、道の精神が理解されないということがある。カラー柔道着問題は、その典型であった。

今日、国際柔道連盟が主催する試合では、選手は一方が白、他方がブルーの色の柔道着を着用することになっている。しかし、このカラー柔道着着用が決定された一九九七年以前は、「柔道着は白またはオフホワイト」のさだめがあり、選手は同じ白い柔道着を着用することになっていた。カラー柔道着への変更を提唱したのは、オランダのヘーシンクであった。ヘーシンクは柔道が初めてオリンピック種目となった一九六四年の第一八回東京大会において無差別級で優勝した人物である。彼は、審判や観客が選手の動きをより明確に識別できるよう、選手は別の色の柔道着を着るべきであると説いた。彼なりの柔道のさらなる普及発展を願ったことであったが、これに猛烈に抵抗したのが日本であった。ヘーシンクの主張は、柔道着を単なるスポーツウェアととらえているばかりか、審判・観客の立場を優先して選手の思いを顧みない…と。そもそも柔道は人格教育として行う修行であり、そこでは試合は二義的のものとなる。第一に考慮されるべきは修行者としての心性であり、この心性は柔道着の白に象徴的に表現される。白は修行者たる柔道家の自覚の表出であり、この柔道本来の在り方に、審判・観客の思惑が入り込む余地はない。無理にまとめれば、反対論者の心の内は、このようであろうか。

柔道を生み出した本家の日本としては、柔道着の“白”は譲れない一線であった。しかし、結果として、日本の柔道観は世界に理解されなかった。

こうしたことは珍しいことではない。柔道に限らず、文化は、これを受け入れた社会の事情に合うように変容させられるのがふつうであるからだ。ローカリゼーションとは、このことをいっている。珍しかったのは、柔道の場合、カラー化というヨーロッパで起きたローカリゼーションがヨーロッパにとどまらず、国際柔道連盟を介して国際規格と化し、本家本元の日本に義務として履行を迫ることになったことである。

もっとも、カラー柔道着を着用しなければならないのは国際柔道連盟が管轄する試合であって、日本柔道連盟が主催する試合は、この限りではない。同じ柔道でありながら、所管が国際柔道連盟なのか日本柔道連盟なのかによって違いがある。柔道着の色に示される精神文化に差がみられるのである。これは、どちらが正しいという話ではない。日本柔道連盟は(そしてたいていの日本人は)柔道着の白にこだわりを持っている。こうした場合、日本に通用する柔道を民族スポーツ柔道、他方、国際社会の柔道(国際柔道連盟の柔道)を国際スポーツ柔道と言い分けることができる。

民族スポーツ(ethnic sport)は特定の民族・地域・社会が伝承する伝統的スポーツを指し、国際オリンピック委員会(IOC)が展開するグローバルな国際スポーツ(international sport)とは違っている。国際スポーツの担い手は国際社会であって、個々の国や民族集団を越えた国際理解や世界平和をめざすのに対し、民族スポーツは、これを担う民族集団のアイデンティティー醸成に向かっている。民族スポーツは民族集団の帰属意識すなわちエスニシティを形成する機能を持つのである。

日本の民族スポーツ柔道なら、柔道着の“白”は外せないこだわりとなる。しかし、これは日本人のこだわりであって、世界に強要することが担保されているわけではない。民族スポーツ柔道と国際スポーツ柔道の違いを認め、二つながらに対応することが求められるのであり、現にそのように進行している。

民族スポーツが国際化するに際しては、これを生み出した側に痛みが伴う。そしてその痛みは、思い入れが強いほど、大きくなる。

同じ問題が、柔道に限らず、武道他種目にも生じている。